

舞踊プロジェクト

(1981年～民舞教室へ)

本郷 美代子 (OSBG'Z会)

1. はじめに.

1978年、大阪支部のメンバーが秋田県わらび座本部で開催された体育同志会全国大会に参加した。従来の運動会の表現運動に違和感を持っていた青年教師が民舞に感動し、それを教えた子どもたちの変革する姿、そして保護者の熱い支持を受けて、民舞実践を続けた。大阪支部の中に民舞が広がっていった。

2. なぜ舞踊プロジェクトを立ち上げたか

舞踊教育が、「身体の表現力を高めるための教育活動」ならば、創作舞踊中心の舞踊教育でいいのだろうか？（創作舞踊も様々ある舞踊文化の1つ）と私たちは疑問をもった。また、「踊る宗教」と揶揄されていた、民舞を体育科の教育として位置付けたいと願った。「踊ることの喜びを大切にすること」を考えたとき、学校教育の限られた時間の中で、何をこそ教えるべきかを追求した。

3. 舞踊プロジェクトで何を考えたか。

1981年橋詰澄子、本郷美代子、木下恵津子の3人は体育の中の舞踊教育として、他の教材（例えば、水泳、マット運動など）と同じような教育の取り組みができないのかと考えた。また、同じ芸術分野の教科である音楽（舞踊は音楽とともに生まれた）と比較検討した。小中学校での主な活動は既成作品（歌や楽曲）を知り、表現する。技術もその中で学ばれる。舞踊でも同じだと考え、既成作品を教材として取り上げた。民舞やプロの創った価値の高い作品などを学び、表現したいと考えた。踊る会を催しながら、教材化を考えることにした。

理論学習も行い、舞踊教育で「目指す子ども像」「子どもにどんな力をつけるのか」、「研究の内容」など、検討し理論化した。また、ペアやトリオ学習で技術認識を媒介した「わかる」「できる」授業を目指した。

1985年大阪大会で、本郷が、民舞分科会を任され、運営し、舞踊プロジェクトの考えてきた指導法（技術の分析し、動きを言葉化して教え合うグループ学習や系統的な指導）で、参加者にわらび座の「みかぐら」を指導した。

「踊りを覚える」段階に要する時間を短縮し、次の質を高める段階に時間をかけることができた。「踊る楽しさ、喜びを感じる」舞踊教育の大きな部分を大切にすることができた。舞踊プロジェクトは、教材「既成作品・民舞」を教材に、「指導法を中心に研究・実践していた。

舞踊教育で目指す子ども像：①リズムに乗って心地よく踊れる子ども②一人で踊るより友だちと心通わせて踊ることが楽しいと思える子ども③自分の踊りを客観化できる子ども
つけた力：①踊りを分析する力②踊りを総合する力③既成作品の中で自分らしい表現ができる力④舞踊の歴史的背景がわかる力⑤発表会などを組織・運営する力

わかる・できる授業をする：①踊りの全体像をつかんで部分へ、そしてまた全体②子どもの発達認識に照応した教え方③グループ学習④組織性。授業をどう組織するか⑤歴史性を現地から学ぶ等を結論づけ、運動会の練習時間のみという制約の中で、できることから実践・検証していった。全部のことを検証するだけの十分な実践ができなかったことが、とても残念だった。

4. 民舞教室

85 大阪のPRキャンペーンとして全ブロックで開始された民舞教室は、今も毎年各ブロックで続けられている。全ブロック参加者の合計は500人近くまで上った時期もあった。運動会集団演技のためだけの参加者もいたが、確実に、大阪で「民舞」が「市民権」を得た、と同時に同志会そのものの認知度も高まったと言える。この民舞教室開催に向けて、舞踊プロが中心となり民舞指導者講習会を行い、民舞指導のありかたを共有した。民舞教室を開催することは、各ブロックの結束や連帯を高め、各ブロック員の民舞指導の力量も高めた。